

自己評価報告書(最終報告)

報告者

言語系コース(英語)
／前田 一平

■平成23年度の目標に対する自己点検・評価

Ⅰ. 学長の定める重点目標

Ⅰ-1. 教育大学教員としての授業実践

本学の目的は、豊かな教養と教育実践力をもった教員を養成し、学校現場に送り出すことにある。このことを実現するには、教科専門・教科教育・教職専門等の各分野の授業が、学校現場の実践と関連性が保たれている必要がある。あなたは、教員養成大学の教員として、本年度はどのような授業計画を立て実現しようとするのか、これまでの取り組み状況を総括し、具体的に示して欲しい。

1. 目標・計画

○英語教員養成に携わる立場から、基本的な英語力が著しく欠如している本学学生に、リメディアル教育を含めた基礎英語を意識的に行う。
○文学研究者および教育者として、本学学生の読解力の養成をはかる。読解力の基本を他者理解と認識し、それを物語を読解する上で実践する。
○新聞記事を授業で紹介し、教育を含む時事問題を共有し、その問題について「よく考え、よく表現する」教育を心がけ、実践する。

2. 点検・評価

○授業「英語リーディングⅠ、Ⅱ」において、発音指導に重点をおいてTOEIC対策を講じる等、小学校の「外国語活動」にも対応する授業実践を心がけた。にわかには英語力の増強は望めないが、特に小学校教員を志望する学生に「外国語活動」に対する意識と緊張感を植えつけることができたものと思われる。
○読解力の養成は「他者理解」をキーワードに、文学の授業を通して意識的に実践した。小学校英語教育に魅力を感じて小学校教員を希望する学生が多いが、小六の国語教科書に掲載されている物語のレベルの高さを示し、読解力の重要性を授業で強調した。
○授業での新聞講読は「初等中等教育実践基礎演習」で実践し、また課題として課し、評価の対象とした。それ以外の授業では時間不足で実践はできなかった。今後は、回数は少なくとも、実践を継続することが必要であると考えている。

Ⅱ. 分野別

Ⅱ-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

○英語の基礎力増強と読解力養成を第一の目標とする。
○学生に留学を勧め、経験の幅を広げる指導をする。
○I-IIに同じ。

2. 点検・評価

- 特にコースの教育活動として、英語コースの学生(学部と大学院)に対してTOEIC-IPを本学で実施し受験させた。学生たちの勉学意識が向上し、ここ数年で全体的に点数も上がっている。
- 留学は授業やゼミを通じて、その重要性を説いた。特に留学に対して消極的な昨今の学生ではあるが、ゼミ生のひとりがオーストラリアの高等学校に日本語教育助手として1年間の予定で出発した。また、コース全体としては、大学院生がふたたびアメリカ留学を果たし、現在留学中である。
- I-1に同じ。

II-2. 研究

1. 目標・計画

- 編集中の『ヘミングウェイ事典』(勉誠出版)を出版する。
- Jamie Ford著Hotel on the Corner of Bitter and Sweetの翻訳(集英社)を出版する。
- ヘミングウェイ没後50周年論集を出版する。
- ヒサエ・ヤマモトの膨大な未出版原稿を、RAの援助を受けて読み込み、整理する。

2. 点検・評価

- 長年編集を続けてきた『ヘミングウェイ大辞典』(勉誠社)が、2012年5月の出版予定となった。2011年度はそのための校正作業を継続した。
- ジェイミー・フォード著『あの日、パナマホテルで』(集英社)480ページ(原題 Hotel on the Corner of Bitter and Sweet)を翻訳出版した。
- 日本ヘミングウェイ協会編、ヘミングウェイ没後50周年記念論集『アーネスト・ヘミングウェイ 21世紀から読む作家の地平』(臨川書店)を出版した。第3章に論文「マノリンは二十二歳 欲望のテキスト『老人と海』」を掲載した。
- ヒサエ・ヤマモトの新聞記事をRAと共同して内容を確認し分類して表にした。これをもとに、ヤマモトのフィクションとジャーナリズムの比較が可能になった。

II-3. 大学運営

1. 目標・計画

- 言語系コース(英語)のコース長として、コースの運営に尽力する。
- 大学院教務委員会など、本学の委員会委員の仕事に尽力する。

2. 点検・評価

- 言語系コース(英語)長として、無難にコース運営を終えた。
- 大学院教務委員会および予算・財務管理委員会委員として、それぞれ2年間の職務を無事に終えた。

Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携, 国際交流等

1. 目標・計画

- 教育実習に参加し、研究授業などを通して助言をする。
- 教育支援・アドバイザーの講師として、依頼があれば進んで引き受ける。
- 個人的にはなるが、アメリカ小説の翻訳を通して、特にワシントン州シアトルの諸機関(ワシントン大学、ウイング・ルーク・アジア博物館、日系新聞「北米報知」など)と連携し、交流をはかる。

2. 点検・評価

- 附属学校における教育実習を観察し、特に研究授業に関して助言指導を行なった。
- 教育支援・アドバイザーの講師依頼はなかったため、実施していない。
- 国際交流としては、研究上、米国シアトルのワシントン大学教授スティーブ・スミダとゲイル・ノムラ、シアトルのアジア地区にあるウイング・ルークミュージアム、日系新聞『北米報知』記者の佐々木志峰氏と交流をもった。これはⅡ-2研究の翻訳出版として結実した。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

特記するほどの貢献はなかったかと思われる。ただ、2011年12月に集英社から小説を翻訳出版し、2012年4月現在で第3刷を数えているという研究成果と、コース長として煩雑な仕事を無難にこなしたことは、本学への貢献として認識されれば幸いである。